

出来る時に、
出来る事を、
出来る人がヤルさんさん
燦燦ニューズレター発行
上智大学金祝燦燦会
〒102-8554 千代田区紀尾井町7-1
上智大学ソフィア会事務局気付

2026年総会と懇親会

今年の総会と懇親会は5月15日（金）にソフィアンズクラブで対面方式にて開催します。皆様ふるってご参加ください。なお、講演会および懇親会にご家族の方の参加も歓迎です。会員の皆様には懇親会の参加費として3000円をお願いしますが、ご家族を同伴される場合の同伴者の参加費はお一人2000円となります。

懇親会に先立ち、燦燦会の会員である元リトアニア大使の白石和子さん（74外露）に講演をお願いしています。白石さんには裏話を含めて、外交官時代についてお話していただく予定です。楽しみにしてください。

総会および講演会はZoomでも配信の予定です。お申し込みは同封の「総会のお知らせ」にあるQRコード/電話にてお願いします。なお、総会、懇親会は会場の都合で申し込み順となりますので、事前申し込みをお願いします。

「嘩道先生を囲む会」を開催しました



11月5日に、前学長で燦燦会の顧問でもある嘩道佳明先生をお迎えし、先生を囲む会がソフィアンズクラブで開催されました。先生は大学の置かれた状況や今後の挑戦などのお話に加え、燦燦会の活動の意義についてお話をされ燦燦会を励まされました。全員で先生に今までのご支援に対して謝意を表すと同時に、先生からは改めて燦燦会が目指す方向を示唆していただいた気持ちです。嘩道先生のお言葉については、特集「嘩道先生を囲む会」をご覧ください。

11月5日に、前学長で燦燦会の顧問でもある嘩道佳明先生をお迎えし、先生を囲む会がソフィアンズクラブで開催されました。先生は大学の置かれた状況や今後の挑戦などのお話に加え、燦燦会の活動の意義についてお話をされ燦燦会を励まされました。全員で先生に今までのご支援に対して謝意を表すと同時に、先生からは改めて燦燦会が目指す方向を示唆していただいた気持ちです。嘩道先生のお言葉については、特集「嘩道先生を囲む会」をご覧ください。

ASFで日本語スピーチコンテストと「お休み処」を開設します

燦燦会では、5月31日（日）に開催されるオールソフィアンズ・フェスティバル（ASF）にて、留学生による日本語スピーチコンテストと、どなたでも気軽に立ち寄れる「お休み処」を開設します。

🔪 日本語スピーチコンテスト：上智大学で学ぶ留学生が、「日本の文化に接して」をテーマに、日本での

体験や感じたことを日本語で語ります。留学生の視点から見た日本の魅力や発見を、ぜひお楽しみください。

🔪 「お休み処」： 会員、留学生、卒業生など、どなたでも自由に参加できます。お菓子や飲み物をご用意して、皆さまのお越しをお待ちしています。交流や懇親の場として、どうぞお気軽にお立ち寄りください。

📍 場所： 1号館 101、102 教室

第17回留学生俳句コンテスト（2025年秋/冬編）の表彰式をZoomで開催しました

上智に学ぶ世界各国からの留学生が日本の伝統文化の一つである俳句“Haiku”に親しみ且つ楽しんで



で貰おうと、金祝燦燦会が年に2回季節を変えて企画・実施をしている恒例のイベントです。1月16日に開催された式では、畔柳会長（68 理物）の主催者挨拶に続き、来賓として毎回ご出席を戴いているサリ理事長を始め杉村学長及び日比谷ソフィア会副会長からそれぞれ心のこもったご挨拶を戴きました。

今回も15の国と地域の留学生17名から全48句の応募があり、英語“Haiku”はFLA（国際教養学部）のA.ユー教授、同 M.トンプソン教授及びソフィア俳句会のマーリィさん（73 国際）に選考を戴き、2名の教授からは各人への賞状授与直後にそれぞれの受賞句について温かて印象的なご講評を戴きました。

また日本語俳句部門はソフィア俳句会メンバーの方々に選考をお願いし、ソフィア俳句会代表の根来氏（80 文国）からは全受賞句についていつもながら的確なご講評を戴きました。

続いて、金祝燦燦会の谷地元氏（69 外露）による英語俳句受賞作品5句及び翻訳者特別賞1句の和訳句も披露されました。最後に、石川副会長（65 外英）による留学生に対する友情と心のこもった挨拶にて終了しました。今回、燦燦会では、畔柳会長、サリ理事長、杉村学長、日比谷ソフィア会副会長のご挨拶をはじめ、表彰式で



俳句コンテスト

使用されたそれぞれのスライドを当日録音された音声で説明し、スライドを自動的に切り替えることで実際のZoom表彰式の「再現」を試みました。入賞者による俳句の読み上げ、入賞句の講評、和訳の解説等を含め、上の QR コードから表彰式を「観る」ことができます。お楽しみください。

2025 年度上智大学留学生夢支援懸賞論文奨学金授与式が行われました

昨年 11 月 26 日に、学生センターの主催で 2 号館 17 階の 1702 特別会議室で、第 4 回上智大学留学生夢支援懸賞論文奨学金授与式が行われました。今や在学生の 7~8 人に一人が海外からの留学生という上智大学で、彼ら/彼女らがどんな夢を持って学んでいるのかを語ってもらうもので、今回は 10 名の出願がありました。一次の「論文」、二次の「プレゼンテーション」審査が厳正に行われ、タンザニア連合共和国出身の



横山 恭子 総務担当副学長



永野仁美 学生センター長から奨学金を授与される Mukulu さん

Mukulu J. Francis さんが最優秀賞に選ばれ、上智学院未来募金の「夢支援懸賞論文」から 20 万円が贈られました。Mukulu さんは、AI の普及によって母国のみならず世界中で差別が助長されている傾向がみられる。それを避けるには、AI の開発にあたっては倫理観の導入が不可欠であると説きました。

一次審査を通った東ティモールの Cristovao J. Quintao さん、カメルーンの Tisighe C. Lum さん、イ

ンドの Ghosh Shrinwanti さんには努力賞として燦燦会から 2 万円が贈られました。学部生の Quintao さんの挨拶で、「申請にあたり、改めて論文のテーマである『上智で学んだ知見を母国でどのように活かして実践していくかの夢』について考え、自分がそのような夢を抱いて学業にあたるべきだ、と気づき、他の学生も同じ気持ちでチャレンジしてほしい」と言う言葉が大変印象的でした。

授与式には横山副学長をはじめ永野学生センター長などご来賓や燦燦会の役員、会員が出席し、それぞれに賞状と金一封が手渡されました。終了後、2 名の留学生とソフィアズクラブに席を移し、気の置けない語らいの時間を過ごしました。

大学の協力（監修）を得て授与式と Mukulu さんの論文発表および努力賞 2 名のお礼の言葉を、スライドショーにまとめました。https://youtu.be/kNXz2kr1Wjs

「一口千円募金」と留学生の支援

昨年度（2026 年 2 月締め）の一口千円募金の結果は 139 件で、1,162,000 円でした。前年度が 150 件で 1,142,000 円でしたので、件数においては 11 件減りましたが、金額では 2 万円の増加となりました。ご協力ありがとうございました。皆様のご寄付は留学生を直接支援するために勉強奨励金、スピーチコンテストと俳句コンテストの賞金、留学生による講演会の謝礼や夢支援懸賞論文の努力賞として使用されています。そのため、一口千円募金は日常的に燦燦会を運営するための経費としてではなく、その使用は上智学院によって管理されています。燦燦会の留学生支援活動の全容は下記の通りです。

- 金祝勉強奨励金の授与（年 1 回）
- 俳句コンテストの開催（年 2 回）
- 留学生による月例講演会
- ASF での日本語スピーチコンテスト（年 1 回）
- ASF での「お休み処」懇親会の運営（年 1 回）
- 「茶の湯」を通じて日本文化の紹介
- 「上智浴衣デー」のための着付け教室（年 1 回）
- 「留学生支援懸賞論文奨学金」で懸賞論文の企画（年 1 回）

2026 年度の一口千円募金の繰越残高は従前どおり 150 万円前後で推移すると見込まれますので、今後は支援の対象となる留学生の人数や金額を増やすこと等について学院と相談しながら進めたいと思います。

曄道先生を囲む会 — 温かな交流と感謝のひととき

昨年、8年間にわたり上智大学の学長を務められた曄道佳明先生が退任されたことを受け、燦燦会では新たに顧問としてご就任いただきました。学長在任中から、曄道先生は燦燦会のさまざまな行事に積極的に参加され、そのたびに留学生へ向けて温かい励ましの言葉を寄せてくださいました。

燦燦会が発行した『10年のあゆみ』誌では、先生は本会の活動について「ソフィア・ファミリーの多様な取り組みの中でも、金祝燦燦会の活動は、いかにも上智大学らしく、叡智の香りが漂い、ソフィアの国際性を象徴するものの一つである」と高く評価されています。さらに、上智大学が掲げる国際性の理念に触れながら、燦燦会が担う留学生支援の意義を「ソフィア・ブランドにおける象徴的な取り組み」として明確に位置づけてくださいました。

こうした長年のご厚情とご支援に感謝の気持ちを込め、11月7日、ソフィアンズクラブにて「曄道先生を囲む会」を開催いたしました。当日は、和やかな雰囲気の中で会員と先生が交流し、燦燦会の歩みとともに振り返る温かなひとときとなりました。



2026年3月13日

金祝燦燦会 春のニューズレターに向けて

曄道佳明

上智大学理工学部・教授
学校法人上智学院・経営企画担当理事



本稿は、2025年11月5日に開催された金祝燦燦会にてお話させて頂いた内容を中心に、改めて書き起こしたものです。

皆さま こんにちは。昨年11月には金祝燦燦会の集いにお声掛けを頂き、誠に有難うございました。これまで、様々な機会にご一緒させて頂き、楽しい時間を過ごさせて頂いた私としては、お声掛けを頂いたこと自体が望外の喜びでした。言葉が見つからぬほど感激をいたしました。



昨年3月まで、2期8年間学長を務めさせて頂きましたが、取組みや構想の先にある自分への明確な問いは、「卒業生の期待に応えられているか」ということでした。卒業生の期待に応えていられれば、それはおそらくこれまでの大学の歩んだ道を良い意味でしっかり踏襲できているのでありましょうし、また現代の社会の変容に対する新たな取組みも評価をいただいているということと言えるでしょう。大学での仕事にあたる時に思い描く対象の中心には、常に在學生と共に卒業生がありました。中でも燦燦会の皆様の日頃のご活動は、この大学（ソフィア・ファミリー）の象徴的な取組みと言えると思います。例えば留学生に対する献身的なご活動を拝見するに、まさに「ソフィア・ファミリー」の精神を具現化して頂いているの

だと強く感じておりました。大学への、このコミュニティへの想いをお持ちの皆様が集まれる燦燦会は、「ソフィア・ファミリー」なるものが一体どういう実体なのかを説明する存在でもあったのです。

やはり卒業生は、大学を客観的に見ていただけますし、一方で主観的にも見ていただける特別な存在です。客観性と主観性の両面を持つステークホルダーは卒業生しかいらっしゃらないのです。大きな組織が歩を進めるにあたって、この両面を有するサポーターが存在することは、この上なく心強いことでありましょう。したがって私自身、できる限り機会を見つけて「大学に対してぜひご意見をいただきたい」とお伝えをしてきたと（自分では）思っておりますが、中でもやはり金祝燦燦会の皆様からの励ましの言葉、いろいろなご意見というのは、それを咀嚼すること自体が私の学びにもなりました。大学の歩みというものを見ると、どこに向かっていくかという目標を定めることが最重要課題ではありますが、一方でやはり大学という組織はその変遷の在りようこそが重要だと考えております。この大学がどう発展を遂げてきたのか、今どういう状態にあるのか、そして次代に何を残していけるのかという変遷のストーリーが、上智大学そのものを表すのだと思うのです。まさにその変遷を見てこられた大先輩の方々からのご意見、あるいは視点に、私たちがどのように触れていくことができるかということは、大学運営の上でも優先課題であると思っております。

というわけで、長々と書き連ねましたが、以上が燦燦会の集いにお声掛けを頂いたことに感激をいたしました理由であります。

さて、現在の上智大学については、現学長、副学長の方々が鋭意取り組まれておられますので、またお話の機会があるかと思っておりますので、ここでは大学を取り巻く環境を見てみたいと思います。高等教育の置かれた環境の中で、大きなインパクトを与える要素は間違いなく少子化であり、そしてこれは少なからず上智大学にも影響を与えると思っております。以前にもお話したかと思っておりますが、（私は）いずれ定員割れを起こすのではないかという具体的懸念を今現在持っているわけではありません。

ただし、入学者層の変化は起こり得るかと思えます。少子化が物理的に避けることのできない現象であると考えれば、上智大学の周辺に位置する各大学がその定員数を変えない限りは、絶対的な入学者数の中で入学者層の変動は理論的に起こると考えた方が良さそうです。そうすると、定員割れは心配ないから大丈夫かというところではなく、私達はやはり教育のカリキュラムを変えていかなければならない、という可能性が浮上します。これからは優秀な学生たちが入学するという期待と共に、上智大学という環境の中でこそ大きく成長する学生をいかに集めるかという点に、学生確保の視点をしっかりとおいていかなければならないのではないかと思います。一方、志願者数を増やすということだけに限れば、まだいくつかの取組み可能性が残っているとも思います。

大学を取り巻く環境でもう一つの大きな影響要因としては、国、文科省の文教政策が挙げられるかと思えます。本学はスーパーグローバル大学創成支援事業の中間評価、最終評価において最高評価Sを連続して獲得した唯一の大学です。これは誇るべきことであると思えますが、このような文科省の方針下において行われる私学への助成の財政的なインパクトは小さくありません。つまり、そのような助成事業に掲げられる「このような私大には助成を行う」というメッセージが、各私立大学の取組みに対して、逆に大きな制約をかける結果も生み出されているのではと危惧いたします。また、あまり関係ないように見えるのですが、国立大学に対するさまざまな支援というものが非常に強化されています。国の世界（ランキング）上位に位置する大学を、といった施策には、私自身は違和感はないのですが、相当程度の資金がそこに回っているという現状があります。先に述べたように、「このような私大には助成を行う」は、一つ間違えると私大の画一化を招きます。これは私立大学にとっては致命傷になりかねません。上智大学は上智大学らしくその変遷をという道筋に黄信号が灯っているとも言えます。例えば通称3000億円基金と呼ばれる助成事業がありますが、ここでは、端的に言うとな系を理系に転換すると大きな助成

金が配分されるということになっています。国が主張する成長分野、医・農・工の分野でどどん人材育成をすべきという政策の具体的取り組みの一つと言えます。歴史が証明するように、成長分野はいずれその成長が止まりますから、さらに次の時代を担う人の育成にも目を向けた、すなわち確固たる基盤を有し、柔軟な成長を遂げられる人の育成という重要な視点を今一度思い起こす必要があるのではないのでしょうか。

AIやデータが駆動する社会になれば、例えばプログラムを書くこと自体これは理系の特権ではなくなります。各分野でどのような取り組みをしようとも、AIにそのプログラムを組ませ、実行させて結果を取得するというところまでは誰もができる時代がもう来ています。このことはむしろ私達教員よりも学生たちの方が長けているかもしれません。そういった中で、理系のある特定の分野だけが非常に重視されすぎているという中で、総合大学としての上智大学、つまり我々の教育精神や建学の理念を実現しようとするときに違和感が生じます。それは当然理系だけで成し得るものではないことは自明であり、上智大学が上智大学らしくあり続けるという原点を見続けることが重要と言えます。（このことは杉村学長が常々おっしゃっています）

現在私は上智大学理工学部の教員であると共に、学校法人上智学院の経営企画担当理事を拝命しています。私に務まるのかという根本的な問題は残りますが、上智大学を有する学校法人でのお役目を頂いたことは大変有難いことと思えます。学長としての経験、そして現在の経営企画担当理事の立場から見ると、上智大学はもう少し余力を持つ必要があるだろうと感じています。ご承知のとおり、私立大学は基本的には学納金でその運営が基本設計されています。その上に国からの助成金や、お預かりしているご寄付が載せられて運営を何とかやっているというのが実態です。やはり余力のない教育というのはよろしくないのだらうと思うのです。大学の執行部が構想する大きなビジョンや、新たな挑戦に対して柔軟な対応ができる環境づくりが急務であらうと思えます。選択の中で学生に対する教育、研究の環境が提供されて

いくということが重要だろうと強く思います。そういう意味では、私の任務の一つである収益の多角化も重要な課題になってくると思っています。このような観点から、「法人経営」について考えるべきことが山積しており今いろいろ勉強させていただいております。経験豊富な皆様からはこのことについてもいろいろなアドバイスを頂ければと思っています。

11月の集いに参加させて頂いたタイミングは、ちょうどその前週にルワンダから帰国をしたところでした。ルワンダという国の名前をお伝えすると、おそらく30年ほど前の大虐殺のことを頭に浮かべられるのではないのでしょうか。この出張では、International Association of Universities というユネスコが旗を振った国際大学連盟に参加してまいりました。私はその連盟の理事を現在務めております。その総会がルワンダの首都キガリにて開かれました。私もやはり虐殺の歴史について強く頭に残っていたので、この国での開催について若干の不安があったのですが、実際に現地に行ってみると、アフリカにこんなに平和な都市があるのかという逆の驚きに陥りました。多くのアフリカの国々に、学長時代、副学長時代に行かせていただきましたけれども、多くの国において、例えば首都の都市部での滞在には一定程度のストレスがあります。いろいろなレベルでの治安上の不安もそうですし、意志疎通の難しさもそうでした。ルワンダの首都キガリでは、1週間の短い滞在ではありましたが、ほとんどストレスなく過ごすことができました。なるほど会場校になったルワンダ大学の学長さんが、「この国は女性が夜中に一人で歩いても全く問題がない」と言われた意味が良くわかりました。自信満々にそうおっしゃるので、(ここだけの話ですが)私も少しだけ夜中に一人で歩いてみましたが、やはり全く問題がない。東京の夜とほとんど変わらない程度に安心できるものでした。人々と話をする中で、急激に発展を遂げ、大虐殺の国から安全・安心な国へと生まれ変わったことに、彼らの誇りを感じ取ることができます。アフリカの奇跡と呼ばれる進展を遂げたということに強い誇りを持つことも当然でしょうが、それが間違いなくこの国のエネルギーになっているように感じ

ました。翻って見ると、大学のキャンパスにおいても、いかに学生、そして私達教職員が自分の属する大学に対して誇りを持っているか、これが大学の発展の重要なエネルギーなのだと再認識することができました。これは同様に卒業生に対しても同じだと思います。卒業生が母校を誇れること、これは大学の基盤的エネルギーだと思うのです。

ぜひ引き続き留学生の支援もしていただきたいと思っています。特に大事なことは、留学生にとって今



上智大学ホームページより

ご支援いただいていることそのものが、彼らの上智での経験になっていること

であると思います。上智大学に身を置いたという経験を、上智大学、ソフィア・ファミリーならではの個性的経験として捉えてもらうことは極めて有意義だと思います。自分は日本の、東京の上智大学で「何か」を経験したのだという誇りをいかに強く持ってくれるかということが、彼らが世界に羽ばたくエネルギーになることには疑いの余地がありません。

学校法人として、大学として、引き続き誇れるキャンパスを創り続け、何とか余力を生み出して新たな挑戦が行われる環境づくりに邁進していきたいと思っています。今後ともどうぞご指導、ご助言を賜りますよう、よろしく願いいたします。この機会を頂きましたすべての方々に心からの感謝を申し上げ、本稿を閉じさせて頂きます。誠に有難うございました。



上智大学ホームページより

75年卒金祝祝賀会で入会の呼びかけ

1975年卒の金祝式典ならびに祝賀会が去る2月28日に行われ、燦燦会では新会員入会の呼びかけを行いました。

金祝を迎える卒業生にコンタクトできるのは祝賀会当日のみに限られており、そのための準備には去年の10月からとりかかりました。金祝祝賀会の実行委員会のメンバー構成などの情報を集める一方、入会案内パンフレットをより効果的なものにするにはどうしたらよいかなどのアイデアを出し合いました。その後、一時期途絶えていた事前案内が可能になりましたが、結局は当日の式典参加者へ渡す手提げ袋の中に同封することのみが可能と確認され、あらためて案内パンフレット作成に力を入れました。そして、従来の燦燦会の活動を網羅的に載せるよりも、燦燦会の会員がその活動に寄せる「思い」を前面に出すこととなり、従来のものから一新したパンフレットが出来上がりました。



祝賀会当日は、会員6名が祝賀会の途中から会場内に入ることが許され、急いで入り口付近に受付デスクを設置しました。しかし、今回は過去とは違って、祝賀会で燦燦会会長のスピーチが許されたのです。時間はわずか2分間程度でしたが、直接燦燦会を紹介することができ、入会への熱いメッセージを贈ることができました。広い会場で、音響も限られた喧騒のなかでしたが、それでも熱心に耳を傾ける参加者もいました。

会の途中から入会手続きをされる参加者がいて、当日、入会した方は最終的に7名でした。あとは、案内パンフレットを読んでいただき、新しい試みであるQRコードから燦燦会の活動のみてもらえれば燦燦会の活動に賛同する方も増えることが期待されます。

当日はサリ理事長や杉村学長にもお会いし、日ごろの活動へのお礼や励ましの言葉もいただきました。

(畔柳文雄 68年理物)

シリーズ
燦燦会の役員に聞く⑦ 会計担当 岸本太郎 (68理物)



**** 留学生による講演会 ****

燦燦会は留学生をサポートする活動をしています。勉強奨励金授与式の後の懇親会や毎月の留学生講演会など、会員が留学生と直接触れ合う機会もいくつかあります。中でも講演会では、留学生からいろいろな話を聞いた後に質問の時間もあり、彼ら、彼女らについてより深く知ることができて、私はいつも楽しみにしています。

講演では、それぞれの出身国がどんな国で、みんながどのような生活を送っているのか、なぜ日本に、そして上智に留学することになったのか、上智でどんなことを学び、どんな研究をしているのか、また日本での生活や日本の社会や文化について、そして卒業後の計画や将来の夢について、いつも興味深い話を聞かせてくれます。この1年間にも、インドネシア、インド、ミャンマー、カメルーン、ガーナ、タンザニア、イタリア、ドイツからの留学生達が話してくれました。我々がなかなか行く機会のない国についても知ることができ、自分の世界が広がるように感じます。

カメルーンから来たティシゲ・カロスタ・ラムさんは大学院で地球環境学を専攻しています。彼女は母国でMBAを取ったが、国内の社会的経済的な危機のために教育制度が混乱して勉強を続けることが難しくなり、安全でより良い教育環境を求めて日本に来たそうです。危機の原因を尋ねたところ、国内のフランス語地域と英語地域との軋轢が原因とのこと。カメルーンは独立前はフランスと英国の植民地に分かれていて、現在の対立もそれが背景にあるようです。

ファルドーサ・イブラヒムさんは両親がソマリアの内戦を逃れて難民としてドイツに来たそうです。彼女はドイツで生まれてドイツで成長しました。自身が生きてきた経験から、異なる文化がどのように統合されるか、特に日本における移民と統合について関心があり、上智では、海外から日本に来て働いている人たちが職場で直面する文化的なバリアと、それをどのように乗り越えているかを研究しています。ソマリアは未だに政治情勢が不安定で、行く機会はないそうです。

タンザニア生まれのジョン・フランシス・ムクルさんは、人工知能(AI)と倫理の関係について研究して

います。ムクルさんは、現在の AI はそのデータセットやアルゴリズムに多くの偏りが含まれており、それが例えばジェンダーバイアス等の社会的不公正を生んでいると考えています。彼はケニアのヘキマ大学で倫理哲学を学び、上智では AI 技術の研究をしています。二つの大学の協力によって、AI 倫理の人材育成、AI の開発における倫理的なガイドラインや AI ツールキットの作成、そして異なる分野の研究機関や国際組織との連携によるグローバルな倫理ガイドライン作りなどを実現することによって、倫理の哲学と技術の橋渡しをすることを目指しているそうです。

留学生講演会は毎月、対面または ZOOM で実施されていて、燦燦会会員は誰でも参加できます。皆さまもぜひ留学生の声を聞いてみてください。

「ソフィアズ顕彰表彰式」で燦燦会の会員4名が表彰されました



「ソフィア会に顕著な貢献のあった会員を顕彰することを目的とした「上智大学ソフィア会貢献者に対する顕彰規程」に基づいて、10月18日（土）に第5期の「ソフィアズ顕彰表彰式」授賞式が開催されました。燦燦会から、田中立夫様（60年卒、経商）、大石（久原）正子様（63年卒、文新）、茂木啓司様（64年卒、外仏）、松尾信武様（66年卒、法法）の4名が顕彰されました。大石様はカナダ在住で表彰式は欠席されました。

＜受賞された田中立夫様より、2026年3月6日＞

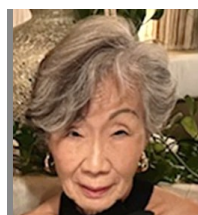
昨年10月18日思いがけなくこのような表彰をいただくことになり金祝燦燦会の会員の皆様にご報告を申し上げます。この受賞は私たち同輩・後輩の皆さんとともに頂いた賞と心得ており志を同じにして頂いた皆様にただただ感謝あるのみであります。特に燦燦会の創設と一緒に携わってくれた今は亡き諸兄には特別な思いであります。賞状の記載に金祝燦燦会の

創設に尽力したと記されていますが、私を中・高校生時代厳しく訓育を下された栄光学園 グスタフ・フォス校長はじめ多くの教員神父様方への感謝の気持ちでいっぱいです。

その気持ちを海外留学生のために今後も尽くすことで応えたいと思っております。70年前、高校の卒業式でフォス校長は「人のための人であれ」と120人の卒業生を励まして下さったのはつい昨日のこのようであります。私を推薦して下さいました金祝燦燦会の諸兄、ソフィア会関係者に心よりお礼申し上げます。

＜出席がかなわなかった大石（久原）正子様より＞

皆様 いつまでもお元気で母校のためご貢献されますようにカナダからお祈り申し上げます。秋に訪日を計画しております。お目もじできましたら幸甚でございます。



■ 燦燦会運営のための献金について

燦燦会の活動資金は、二つの「財布」によって支えられています。一つは上智学院の「未来募金」である「一口千円募金」を原資とし、留学生への奨学金や賞金に充てるもの。もう一つは、燦燦会の運営のための資金で、入会時にお支払いいただく終身会費や、会員の皆さまからの献金（寄付）によって成り立っています。これまで献金は、主に対面での会合の際に皆さまから頂戴してまいりました。しかし、コロナ禍以降は対面で集まる機会が減り、それに伴って献金額も少なくなっている状況です。

そこで、対面以外でもご協力いただけるよう、燦燦会の預金口座へのお振り込みによる献金の受付を始めました。無理のない範囲でお力添えいただけましたら幸いです。

献金の振り込み先

＜ゆうちょ銀行から振込みの場合＞

ゆうちょ銀行 総合口座 記号:10130 番号:60870121
口座名: 上智大学金祝燦燦会

＜他行から振込みの場合＞

ゆうちょ銀行 総合口座 店名:〇一八(ゼロイチハチ) 店番:018
普通預金 口座番号:6087012(上の振込番号とは違います)
口座名: 上智大学金祝燦燦会
ATM等で支店名を入力するときの頭文字は「セ」です

献金は義務ではありません。またその金額や時期は任意です。

■ 会員の状況

2026年3月現在の登録会員数は、540名です。帰天、退会、連絡不要、連絡不可能が126名あり、実質会員数は414名となります。

編集後記 嘩道先生が「囲む会」でお話くださった内容をぜひ皆様と共有したいと思い、海外出張中にもかかわらず原稿をご快諾いただきました。先生に心より御礼申し上げます。また、2022年の3名に続き、第5回「ソフィアズ顕彰表彰式」では受賞者9名のうち4名が燦燦会の会員でした。おめでとうございます。対面の会議やイベントでいただいているご寄付は、振り込みでも受け付けられるようになりました。どうぞご利用ください。そして、2期4年にわたり会を導いてこられた畔柳会長の任期が、いよいよ6月で満了となります。